

刀 林



丸山記念総合病院院長就任

題字 故前田和三部名誉教授
発行所 東京都新宿区信濃町35
慶應義塾大学医学部
外科学教室同窓会(刀林会)
発行人 松本純夫



掛札 敏裕 (62回)

2024年4月1日に丸山記念総合病院院長を拝命いたしました。私は1983年に大学を卒業後、6年の所定の研修の後に済生会神奈川県病院に4年、国立小児病院小児医療研究センターに3年、川崎市立川崎病院に21年、川崎市立井田病院に7年勤務いたしました。研修期間に国立療養所神奈川病院に1年おりましたので、神奈川県に合計33年と長く務めておりました。そのおかげのためか、最後の2年間は神奈川県慶應連病院外科研究会(通称4K会)の会長を前会長の金井歳雄先生(59回)から引き継がせていただき、1期のみではありませんが日本外科学会の代議員も務めさせていただきました。ちなみに次期日本外科学会の会頭を決める選挙がたまたまあ

り、票を投じることで貢献する機会に恵まれたことは貴重な経験でした。さて今回の院長就任を機に住み慣れた神奈川県を離れ、初めての埼玉県でもある当院の近くに転居いたしました。当院は人口11万人、高齢化率31%のさいたま市岩槻区にある唯一の総合病院で、周囲は比較的平坦な土地に住宅街が広がっております。1896年に内科と産科の丸山醫院として開設されて、古川外科が合流し一時383床の総合病院となったこともありますが、様々な変遷を経て現在は241床と

なっております。急性期病床とともに回復期リハビリテーション病床および地域包括ケア病床を有し、検診部門としてレインボークリニック、訪問看護ステーション「いわつき」を開設しております。特徴的なのは地域の方々が安心して受診できるようにと外来受付時間が8時30分から12時30分までと長く、休診日が水曜日と第1日曜日、祝日で土曜日・日曜日に通常通り受診や予定手術ができることです。また救急にも力をいれており昨年度は2688台の救急車を受け入れ564人が即日入院となっております。分娩件数は288件、透析件数がのべ10169件と地域になくてはならない病院として開設から128年目を迎えております。

私は院長としては8代目になります。外科スタッフは以前より昭和大学と埼玉医大から派遣されていますが、最近の院長は刀林会員で5代目戸倉康之先生(41回生)、6代目米川甫先生(51回生)、7代目大石崇先生(61回生)が務められております。また病院の理事として古川俊治先生(66回生)、前理事長のご子息で外科手術の主力である丸山正太郎先生(82回相当)がいます。長い歴史と伝統のある病院ですが、コロナ禍の影響、医師の働き方改革、働き手不足、建物の老朽化、医療DX、光熱水費や物価の高騰など非常に厳しい状況です。浅学菲才の身でこれらの難題を乗り切っていくのかどうか不安ですが、何とかこれからの地域に根差した地域から信頼される病院として職員とともに頑張っていこうと考えております。刀林会諸先生方の変わらぬご指導とご支援を今後ともどうかよろしくお願ひ申し上げます。

国際医療福祉大学三田病院院長就任



池田 佳史 (67回)

2024年4月1日付けで国際医療福祉大学三田病院の院長を拝命いたしました。就任にあたり、日頃からご支援を受け賜りました刀林会の諸先生方、特に慶應義塾大学常任理事・外科学教授北川雄光先生に厚く御礼申し上げます。国際医療福祉大学は、医療福祉の専門職育成と地位向上をめざし、1995年に開学した日本初の医療福祉の総合大学です。都内港区のほか、栃木県、千葉県、神奈川県、福岡県の5キャンパスに10学部25学科を備え、大学院まで含め約1万人余の学生が学んでおります。2017年4月には千葉県成田キャンパスに医学部を新設し医師を養成する部門も備わりました。2024年3月には2期生が卒業し、来年度には本学出身の専修医が誕生いたします。

三田病院のルーツは、1933年に開院した大蔵省(当時)所轄病院にあります。その後1949年に「日本専売公社東京病院」と改称し、1985年に日本専売公社の民営化に伴い、「日本たばこ産業株式会社東京専売病院」となりました。そして2005年に東京専売病院から国際医療福祉大学が継承し国際医療福祉大学三田病院となりました。2007年に北島政樹先生が院長として赴任し、がんに強い三田病院としての基礎を築き2008年に東京都認定がん診療病院(2015年より東京都がん診療連携拠点病院)として認定されました。2012年には、地上11階、地下2階の新病院を開院して予防医学、総合診療、各専門の診療科、救急診療、リハビリテーションなど、時代に即

した最先端の医療をご提供できる291床の病院として生まれ変わり、同時に東京都指定二次救急医療機関に指定されました。現在では37の診療科・センターを有する病院となり、90有余年の長きにわたり港区三田の地域医療を担ってきた病院としての伝統と大学病院としての特色を融和させた病院となっております。手術室はハイブリッド手術室を含む11室あり、2023年度の手術件数は、3,725件(内全身麻酔2,622件)でした。また、2023年9月より国産初の手術支援ロボット「hinohime サージカルロボットシステム」を導入し開始しております。

私は1988年に一般消化器外科学教室に入局し、1990年に当時の食道班として安藤暢敏先生の基で食道外科を学んだ後に、1998年より帝京大学第一外科で小平進先生・高見博先生の下で消化器外科・甲状腺外科を学んできました。2014年に当グループに所属し2019年より国際医療福祉大学熱海病院院長、2024年より三田病院院長となりました。現在も外来・手術を担当し腹腔鏡手術・内視鏡下甲状腺手術を担当しています。当院外科は、刀林会出身の私と星本相淳消化器センター長(74回)、加藤文彦(86回)、藤原弘毅(99回)を含め全員で常勤8人体制です。今後もがん診療の拠点・地域の2次救急医療を提供する救急医療の拠点として、国際医療福祉大学医学部の教育機関として、初期研修医・後期研修医の育成機関としての役割を担ってまいります。刀林会の皆様におかれましては、益々のご指導、ご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

栃木医療センター院長就任

2024年4月に国立病院機構栃木医療センターの院長を拝命しました石原雅行と申します。前任の田村明彦院長からの刀林会同士のバトン引渡しになりました。

私は1997年に当院に赴任して、27年間脳神経外科医として栃木県の脳卒中医療に取り組んできました。もともと宇都宮出身で58年前に当院で生まれました。手術を終えた患者さんから、退院の時になって『先生がランドセルを引きずって歩いていた子供の頃を知っているよ』と言われ、びびりしたことあります。生まれ故郷で医療を行うと言うのは、知り合いも多くやりがいがある反面、常に周囲から監視(笑)されているような緊張感があります。

栃木医療センターは、陸軍病院時代より数えると115年の歴史のある病院です。戦後の国立病院時代からだと私が13代目院長にな

るそうです。勝又貴夫10代目院長(52回・刀林会)時に、急性期総合医療センターを目指して『栃木病院』と改称しました。敷地内に点在する旧陸軍病院時代の遺構があり、時間がある時は散策すると面白いです。正面ゲート脇には枝垂れ桜の古木があります。春は枝垂れ桜から始まり、ソメイヨシノ、八重桜と順に開花し長い花見ができます。正門右手には宝木町の地名の由来になった『宝の木』があります。看板が小さいので注意して見ないと見過ごしてしまいます。また敷地を囲む生垣に埋もれた古いレンガの門柱などは敷地に発見できます。

は2014年に竣工した新病棟と新手術・リハビリ棟と古い建物が混在し、長い廊下で結ばれています。外来棟・検査棟が古いので、初診の患者さんには古ぼけた病院のイメージが強いのですが、入院手術になる最新の設備でびびりしましたと驚かれます。現時点で常勤医師は61名、常勤歯科医師7名です。慶應義塾大学・獨協医科大学・自治医科大学などからの派遣のほか、基幹プログラムのある内科・総合内科(総合診療科)の人員が多くなっています。慶應義塾大学派遣の外科系の人員が充実しているのが特徴で、まさに刀林会に支えられた関連病院と言えます。医師数が少なかつた頃の名残で、診療科の枠を超えて助け合う風土が残っています。

今後は病院変革期です。アテナを高くして地域ニーズを察知し、勝又貴夫名誉院長の定めた病院理念『信頼・貢献・協働』を引き継ぎ目標としていきます。宇都宮市内には慶應義塾大学関連病院が3つあります。済生会宇都宮病院・県立がんセンターとうまく連携して、今後の少子高齢化人口減少時代の流れに耐えられるように医療の質を担保した上での病床数コントロールと効率的で冗長性の高い医療体制を構築するの使命だと思っています。どうぞ、よろしく願い申し上げます。



石原 雅行 (69回相)

院長退任

さいたま市立病院院長退任に当たって

この度、さいたま市立病院院長を退任するにあたり、これまでご指導いただきました慶應義塾大学医学部外科学教室および刀林会の先生方に感謝の言葉を申し述べます。

私は1982年に慶應義塾大学を卒業し、外科学教室に入局、1985年に呼吸器外科(当時は肺外科研究室)へ入り、関連施設と米留学を経て、1997年に帰室、呼吸器外科で15年間勤務した後、2012年にさいたま市立病院へ呼吸器外科部長として赴任しました。2014年に副院長兼任となり、窪地淳院長(外科58回)から病院運営のあり方をお教えいただき、窪地先生が10年の歳月をかけて建設した新病院棟に2019年年末に移転、運営を開始、窪地先生の退官に伴い、2020年4月に院長職を引き継ぎました。

地域がん診療連携拠点病院、地域母子周産期医療センター、救命救急センター(2020年12月より)、地域災害拠点病院地域医療支援病院等の指定を受けており、機能の維持、発展が課題でした。新病院では手術室を12室設け、内視鏡手術をどの部屋でもできる環境を整え、ロボット支援手術も機種をXiに変更して機能を高めました。

院長就任時は、COVID-19が猛威を振るい始めた時期に当たりました。第2種感染症指定病院としての責務を果たすべく、毎日絶え間なく搬送されるCOVID-19患者者に対応しました。当時、慶應義塾大学病院院長であった北川雄光教授の采配をリアルタイムでご教示いただき、慶應のスキームを参考に、病院運営を行いました。当院では医師の数も限られるため、初期研修医を除き、診療科を問わずコロナ診療に携わっていただき、感染の波を乗り越えてまいりました。最も患者が多かつた第7波では病

棟を3つ閉鎖、重症者を含む50人近い入院患者さんを収容し日々治療に当たりました。コロナ診療に当たる人員を確保するため、予定手術枠を制限した期間もありました。外科系各科の先生方、麻醉科、手術室看護師さんの協力で、全体のパフォーマンスを維持・改善しつつ、なんとかコロナ禍を乗り越えられました。

また、2024年1月の能登半島地震に対応して、珠洲市にDMAT隊を5日間派遣、災害支援看護師も派遣し、病院機能の幅が広がりました。



堀之内 宏久 (61回)

さいたま市立病院は、外科学教室をはじめとして多くの診療科が慶應義塾大学医学部の支援を受けています。慶應の指導体制・診療科間の垣根の低いこと・互いに協力し合う風土は、そのままさいたま市立病院の診療体制の根幹となっております。初期研修医が研修を受けたい病院へと成長してきました。2023年度の初

期臨床研修医のマッチング希望順位第1位選択数で全国一位を獲得できたのも、慶應の力であると思います。さいたま市立病院はこれからも伸びしろのある病院です。外科学教室、刀林会の先生方のご支援でより素晴らしい病院となることを確信しています。このような病院で働きましたことを深く感謝し、ご指導いただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

2023年度の初

丸山記念総合病院 病院長退任



大石 崇 (61回)

この度、令和6年3月31日をもって医療法人慈生会 丸山記念総合病院の病院長を退任いたしました。令和2年4月1日に米川甫前院長の後を引き継ぎ、4年間にわたりその任を務めさせていただきました。

当院は急性期病床ととも地域包括ケア病床、回復期リハビリテーション病床を合わせもち、214床で運用しています。埼玉県岩槻区で唯一の総合病院であることから地域の急性疾患患者は原則として受け入れることを目標に救急対応を中心とした診療を行ってまいりました。大過なく任を終えられたことは諸先輩方、当院の職員、岩槻医師会近隣の医療機関、行政の職員など実に多くの方に支えられてのことと認識してお

り、ご支援いただいた皆様、ご支援いただいた皆様、たいへん感謝しております。この4年間に振り返るとコロナ対応が大きな比重を占めた期間であり、多くの中小病院と同じく当院も十分な感染管理体制が整っていないとは言えない中で対応となりました。コロナ患者の受け入れやクラスター発生時などにおいては不慣れなことばかりで、現場の職員による臨機応変な対応が力となりました。発熱外来の設置においても、建物の構造上から患者導線のほとんどを建物外で行うような設置とせざるを得ない時期が長く続き、夏の猛暑や冬の降雪など厳しい労働条

件においても職員の献身的な診療によって継続していくことができました。また、コロナ禍による患者数減はいたしかたないところでしたが、当院では早い時期から受診患者数の回復が見られ、当院の長い歴史から地域の信頼を得ていることを感じました。この期間は当院が新病棟建築に向かって動く時期と重なり、そのためにも財政基盤を強固にすることが求められました。多くの職種の参加によって診療報酬上の加算算定をみなおし、回復期病棟の活用などを通じてDPC算定上の入院期間を短縮して機能調整係数も少しずつではありますが増

加してきました。また、DPCコーディングの適正化を行うなどのことから入院単価も増加しました。さらに、患者数増加のために救急患者の応需を積極的に行うとともに岩槻医師会などの近隣医療機関との連携強化を努めました。本年4月からは掛札敏裕先生(62回)が赴任していただき、私の在任期間にはできなかった変革を行って今以上に岩槻の医療に貢献していくものと期待しております。これまでと変わらぬご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

都立小児総合医療センター 院長退任 T型チームを目指して



廣部 誠一 (62回)

外科医になり41年、この3月で定年を迎えました。このうち32年間に都立小児総合医療センターで働き続けることができました。日頃からご支援を受け賜わりました刀林会の諸先輩、慶應小児外科グループの皆様、感謝の意を表したいと思

います。振り返ると4つの外科医人生の転機がありま

【ヨット部との出会い】
大学に入学して、塾高ではワンダーフォーゲル部で、その先輩の金井歳雄先生(59回)が所属していた山岳部に入ろうかと考えていました。が、渡邊昌彦キャプテン(58回)に勧誘されるままにヨット部に入りました。クラブ中心の生活となり、

合宿という共同生活で上下関係なく明るい雰囲気、
「好きなことを頑張る」、「皆で」を機嫌に連帯する「こと」を学び、いわゆる「T型人材」のクラブでした。ヨットにのめり込み、レーザ級では世界選手権にも参加しました。外科に入局した時、渡邊昌彦先生から「歌って踊れる外科医」になれと

【小児外科との出会い】
1983年に外科入局したときは、当時、石原裕次郎を助けて脚光を浴びていた心臓外科医に憧れていました。しかし小児外科を選んだ理由は、卒後1年目で小児外科をローテートした時に新生児胃破裂を経験したことです。勉強してみると、小児外科には未開の領域があり、救命するだけでなく20年後のQOLを考慮した治療法が必要で、魅力的な分野と思いました。

【都立小児との出会い】
1986年に勝俣慶三先生(31回)率いる小児外科に入り、レジデント出張で運良く清瀬小児病院で研修できました。石田治雄先生(43回)、林奥先生(48回)、鎌形正一郎先生(52回)、上野滋先生(57回)の

ご指導のもと、小児外科のいろはを学びました。各診療科は高い専門性を追求しながら、各診療科間の連携がよく、「T型人材」の職場で、留学後にも再就職でき幸運でした。当時、未開の領域として手術が困難な先天性気管狭窄症があり、新しい術式を導入し、症例毎に工夫を重ね、徐々に手術成績も向上し全国から症例が集まるようになりました。ラオスからの症例も経験し、無事帰国できましたが、最近、その少女から手紙をもらいました。高校生に成長していて、「生きている奇跡に感謝、だれかを助けられる人になりたい」と書かれていて、小児外科医を続けて良かったと思

【新病院の設立】
石原知事の決断で、清瀬小児病院、八王子小児病院、梅ヶ丘病院(精神科)、府中

病院小児科が府中の地に移転統合する計画が決まり、2010年3月に都立小児総合医療センターとして林奥院長(48回)のもとスタートしました。私は2013年に副院長、2018年に院長となり、コロナ禍、働き方改革、独法化移行等、不確実性に対応するため、職員には「T型チーム」を目指そうとメッセージを送ってきました。専門性とともに、総合力、横連携できるチーム医療が大切です。退任後は都立病院機構理事として都立病院に恩返ししていきたいと思

生薬には、個性がある。

漢方製剤にとって「良質」とは何か。その答えのひとつが「均質」である、とツムラは考えます。自然由来がゆえに、ひとつひとつに個性がある生薬。漢方製剤にとって、その成分のばらつきを抑え、一定に保つことが「良質」である。そう考える私たちは、栽培から製造にいたるすべてのプロセスで、自然由来の成分のばらつきを抑える技術を追求。これからのあるべき「ツムラ品質」を進化させ続けます。現代を生きる人々の健やかな毎日のために。自然と健康を科学する、漢方のツムラです。

良質。均質。ツムラ品質。

株式会社ツムラ <https://www.tsumura.co.jp/> 資料請求・お問合せは、お客様相談窓口まで。
医療関係者の皆様 tel.0120-329-970 患者様・一般のお客様 tel.0120-329-930 受付時間 9:00~17:30(土・日・祝日は除く) 2021年4月制作

薬価基準収載

血漿分画製剤

ボルヒール®組織接着剤

生体組織接着剤 BOLHEAL® 献血

特定生物由来製品 処方箋医薬品 注意-医師等の処方箋により使用すること

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む注意事項等情報については電子化された添付文書をご参照ください。

製造販売元
KMバイオロジクス株式会社
熊本市北区大蓮一丁目6番1号

販売元
一般社団法人
日本血液製剤機構
東京都港区芝浦3-1-1

BOL-202405

【文献請求先及び問い合わせ先】 一般社団法人 日本血液製剤機構 くすり相談室
〒108-0023 東京都港区芝浦3-1-1 医療関係者向け製品情報サイト <https://www.jbpo.or.jp/med/di/>

独立行政法人 国立病院機構神奈川病院 院長退任



橋詰 壽律 (63回)

2024年3月31日をもって、独立行政法人国立病院機構神奈川病院院長を退任致しました。これまで、刀林会ならびに母校の諸先生方には大変お世話になりました。厚く感謝申し上げます。

私は1984年に大学卒業と同時に外科学教室に入局し、佐野厚生総合病院および国立療養所晴嵐荘病院(現、国立病院機構茨城東病院)にフレッシュマン出張し、石原恒夫先生の主宰する肺外科研究室に入りました。1990年にレジデントを修了し国立療養所神奈川病院(現、国立病院機構神奈川病院)に出張し、2002年に国立療養所晴嵐荘病院に赴任しました。2014年に再び国立病院機構神奈川病院に戻り、2024年に定年退職を迎えました。院長には2018年に就任しましたので6年間院長職を務めたこととなります。この6年間の間には様々な出来事がありました。

2020年2月に横浜港にクルーズ船が入港すると同時に県の要請により当院でも結核病棟の陰圧室にコロナ患者の受け入れを開始しました。当時まだワクチンおよび有効な薬もなく重症化率も高い新疾患であり院内は大変な緊張状態でありました。その後感染が市中にも拡大し県とも協議を重ねた結果、神奈川県内の結核患者をほぼ全て当院に集約し県内の他の施設の結核病棟をコロナ専用病棟として運用することで対応しました。その後も感染状況に合わせて一個病棟をコロナ専用病棟として運用したり、ビニールカーテンを設置する工事の施行により病棟をゾーニングして運用するなど様々な工夫を重ねてなんとか対応致しました。2023年5月に2類から5類に変更となりましたが3年半にわたってのコロナ対応に病院の職員には大変な負担をかけたものと理解しております。

次に大きな出来事は2021年に新病棟が完成したことです。新病棟は一般病

独立行政法人 国立病院機構栃木医療センター 院長退任



田村 明彦 (67回)

2024年3月をもって栃木医療センター院長を定年退職となりました。多少の回り道をしてきたため早目の退官となります。刀林会の皆様には長い間お世話になり有難うございました。

6年間の院長在任中にはほかに色々な出来事がありました。北島先生が教授に就任された頃で新たにできた移植班にも時々参加しました。今は残っていない犬舎という実験場で、ブタを使って肝移植の研究をしていました。食道班としてはイヌを使って微小循環の実験をしていました。犬舎ではレジデントが集まって焼肉大会をしたことがあります。研究の成果がでないまま日野市立病院にチーフ出張となり、程なくして国立小児病院研究センターに国内留学の機会をいただき、ラット肝移植で何とか論文を書くことができました。

1988年、卒業に当たり外科の門を叩いた時、面接の担当は阿部教授と心臓外科の今村先生で相当絞られた記憶があります。伊勢慶應病院、済生会宇都宮病院に研修出張後、大学に戻って食道班に所属となりました。北島先生が教授に就任された頃で新たにできた移植班にも時々参加しました。今は残っていない犬舎という実験場で、ブタを使って肝移植の研究をしていました。食道班としてはイヌを使って微小循環の実験をしていました。犬舎ではレジデントが集まって焼肉大会をしたことがあります。研究の成果がでないまま日野市立病院にチーフ出張となり、程なくして国立小児病院研究センターに国内留学の機会をいただき、ラット肝移植で何とか論文を書くことができました。

小児病院は大蔵病院と統廃合となったので、大田原赤十字病院に出張となり、救命救急センター担当と外科中堅として非常に密度の濃い臨床となりました。2003年夏、ベルリンフンボルト大学に留学しラット腎移植に従事しました。移植を通して得た免疫学の知識はその後の臨床に役立っています。

2005年9月、栃木病院外科医長として帰国した時、病院の状況は悪くなりつつあり、約400床の急性期病院で医師数40人を切る状態でした。当院の院長は歴代刀林会会員も多く、居場所がなくなるとの危機感もあって臨床に加え病院運営、地域連携など更に密度の濃い生活となりました。県内には以前よりお世話になっていた先生が多く色々とお力をいただきました。一丸となつてなんとか持ちこたえた結果、医師数は徐々に増え経営も上向きとなつて新病棟が完成し、病院名も改称しました。東日本大震災では転院患者を受け入れ、2020年コロナ

がやって来ましたが、第三波あたりで医療機関と行政の連携が確立し、当院も中心的役割を果たしました。三四会の存在もなしでは語れません。退官後の勤務先を探していたのですが、県内のいくつかの施設で一日でも来てくれとのことで、とりあえず非常勤をしながら考えていくつもりです。医長で赴任した時必要に迫られマンモグラフィの資格を取得し、食道班時代から内視鏡とバリウム診断の勉強会に参加させていただき、ここ数年は読影も業務の一つとなつています。フレッシュマンから院長までほぼ一つの県で務められたのは貴重な経験です。お世話になった先生は数えきれず、この場を借りて感謝いたします。少子高齢化、人口減少、働き方改革、これらも大変な状況が続きますが、刀林会の益々のご発展をお祈りするとともに、引き続きよろしくお願いたします。



2023/06/21



2023/06/21

帝京大学医学部長の退任にあたって



帝京大学名誉教授
川村 雅文 (61回)

私は2010年4月に帝京大学医学部外科学講座病院教授(呼吸器外科担当)として慶應義塾大学医学部外科学教室(呼吸器外科)から帝京大学板橋キャンパスに赴任いたしました。ご承知のように帝京大学医学部は東京大学出身の先生方が多いことで有名ですが、帝京大学医学部外科学講座は赴任当時、主任教授が高見博教授(49回)で、その他にも乳腺担当の池田正教授(53回)、血管外科の新見正則准教授(64回)、消化器に池田佳史准教授(67回)がいらっしゃり大変心強かったことを覚えています。

当初は呼吸器外科の立ち上げとして手術件数の増加と入局者の確保に特化してひたすら走り回っていました。手術件数も世間並みに増え、入局も安定して人が入るようになるのに3、4年かかりました。お陰様で昼は手術、夜は勧誘(宴会?)という楽しい日々を

過ごすことができました。楽しく5年を過ごしたところで、2015年3月当時主任教授、兼診療担当副院長、兼帝京がんセンター長でいらした池田正先生が定年を迎えられ、私がある三役すべてを継がせていただくことになり、これをもって楽しかった手術と夜の勧誘の日々は終わりました。

2018年4月より医学部長を拝命しました。教育と研究が仕事の中心で臨床系からはほぼ切り離される上、2年後に医学部教育の国際認証(JACME)の受審も控えていたことから、この時ばかりは全く腰が引けてしまいました。学長から強く説得されてお引き受けしました。学生教育については医師国家試験の出題委員をやった以外にこれといった経験もありません。教務部長、医学教育センター長にお任せ、JACME

の評価基準に合わせるための教養体制の構築が自分の仕事と割り切ることに致しました。私学としては無視することのできない医師国家試験対策については、幸いにも学生時代の国試対策委員の縁故で(随分と古い話ですが)、国試予備校界の大御所である塩澤昌英兵庫医大教授(63回)の全面的なご協力を得ることができ大変助かりました。

定年までの4年の任期というところで始まった医学部長職ですが、コロナ禍によりJACMEの審査が2年延期となり、逃げ切り御免が許されるはずもなく、6年もの長きにわたり医学部長を務めさせていただくこととなりました。お陰様でJACMEも無事認証され、またこの間マスコミに晒されることもなく職務を全うできました。関係した多くの皆様方のお陰とこの場をお借りして感謝申し上げます。今後は帝京大学医学部

教授退任

埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科教授退任にあたって



埼玉医科大学名誉教授
中山 光男 (61回相)

令和6年3月に27年間勤務した埼玉医科大学総合医療センターを定年退職となり、16年間務めた呼吸器外科教授を退任しました。在任中に賜りました刀林会のご厚情とご指導ならびに外科学教室のご支援に心より感謝申し上げます。

昭和57年に金沢大学を卒業後、慶應義塾大学医学部外科学教室に入局。フレマン出張先の晴嵐荘病院で柳内登先生(40回)の薫陶を受けて呼吸器外科に進路を決め、肺外科研究室に所属しました。石原恒夫先生(30回)のご指導の下、気管支再建手術の研鑽を積み、気道再建に関する研究で学位も取得し、気管支支の外科的治療が私の専門分野となりました。チーフ出張先の立川共済病院で海外留学をさせて頂き、帰国後は立川病院で臨床医を続けるつもりでしたが、教授に就任する菊池功次先生

末筆となりますが、皆様方のご健勝と外科学教室の益々の発展を祈念申し上げます。

東京医科歯科大学肝胆膵外科教授退任 柏市立柏病院院長就任



東京医科歯科大学名誉教授
田邊 稔 (64回)

2013年4月に本学に肝胆膵外科学分野教授を拝命して以来、早いもので11年が過ぎました。赴任初日は伝統ある本学の教授職を務める緊張感と、未知の職場に赴く不安感で一杯だったことを昨日のこのように覚えていきます。

肝胆膵外科の領域では、まさに私が医科歯科に赴任した時に腹腔鏡下肝・膵切除の導入期を迎えました。そのような時に、教室から『腹腔鏡下肝切除の術前困難度評価法』や『腹腔鏡下肝切除の全国集計』など歴史に残る研究論文を発表できたことは、『低侵襲手術の医科歯科肝胆膵外科』が広く認知される契機となりました。また、2023年の第35回日本肝胆膵外科学会では、教室から『肝臓切除可能性分類』に関する論文を世界に向けて発信し、この分野に一つの足跡を残すことが出来ました。私自身

のキャリアの集大成として2022年に主催の機会をいただいた第20回日本消化器外科学会大会では、同学会理事長として、また私の母校である慶應外科教授として北川雄光先生に私の会長講演の司会を賜り、生涯の思い出となりました。

私にとって何より幸運だったのは、極めて優秀な教室員に恵まれたことです。一名の脱落者も無く全員が学位を取得し、彼ら多くは国内外の留学で自分のキャリアに磨きをかけることを望み、極めて外向的でチャレンジングであり、私の初代大学院生は、今や教室の主力スタッフとなり、私が労すること無く新しい大学院生を立派に指導しています。このように力強く育った教室員達を見るにあたり、私の大学での使命の区切りを実感した次第です。

前述の2つの大きな学会主催を終えたタイミングで、医科歯科大学の学長から柏市立柏病院の院長職のオファーがありました。柏市は常磐線沿線の歴史ある町並みに加え、つくばエクスプレス沿いでは新しく都市開発が進んでおり、伸び盛りの魅力的な地域です。柏市立病院は1939年に陸軍病院として創設され、戦後は国立柏病院を経て1993年より現在の柏市立柏病院として開院しました。

長く親しまれてきた病院ですが、施設の老朽化が激しく新病院建設が決定したため、その事業を請け負う院長として私が指名された次第です。多くの苦勞が待ち受けるであろうことは容易に想像ができましたが、病院が生まれ変わる現場に立ち会うことの魅力に惹かれ、この話を引き受ける決心をしました。新病院の設計、診療科の拡充、地域と

の交流など全てが初めての経験であり、一から勉強し直しております。刀林会の皆様には今後ともご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

学会紹介

第31回日本神経内視鏡学会



慶應義塾大学医学部
脳神経外科教授
戸田 正博 (66回)

この度、第31回日本神経内視鏡学会を2024年11月7日(木)〜8日(金)の2日間、京王プラザホテル(新宿)にて開催させて頂くこととなりました。脳神経外科において低侵襲化を牽引する重要な学会であり、革新的な手術法の開発や治療成績を大きく向上させた実績から、神経内視鏡学会の学術活動は日本脳神経外科学会において、さらに大きな役割を担うことが期待されています。これまで慶應義塾大学では、第2回(1995年)、第15回(2008年)を主催いたしました。このような主要な学会の会長を拝命し、大変光栄に思っております。

今回のテーマを「未来の手術―さらなる挑戦―」といたしました。医療機器と技術の進歩に伴い、様々な神経内視鏡手術が開発され、神経内視鏡手術の適応は大きく拡大しました。最近で

は、高精細な内視鏡に加え外視鏡を各種アプローチに用いることにより、さらなる低侵襲手術への貢献と発展が期待されています。現在の課題を認識し、その解決に向けて挑戦するマインドこそ、より良い医療を創造するために最も重要な力となります。一方、多くの術者が安全に施行できる有効な手術のみが、広く普及し時代を経て受け継がれていきます。本学会では、10年先の将来を見据え、未来の手術について考えてみたいと思っております。

最近の傾向として、神経内視鏡学会においても、より専門化された分野のセッションが多く企画されています。一方、さらなる医療・技術の発展に、異分野との連携、協働が必須です。私自身、頭蓋底腫瘍の治療成績向上を目指して、経鼻内視鏡頭蓋底手術に長年取り組んできましたが、他分野

の発表を視聴する中で様々な「気づき」があり、多くを学びました。本学会では、領域横断的なシンポジウムを企画し、各分野のエキスパートによる洗練された手術とともに、課題となる事例を学ぶことにより、活発な議論ができればと思っております。神経内視鏡学会は、脳神経外科学会において技術認定制度を有する指導的学会として、教育という重要な役割も担っております。神経内視鏡手術では、特殊

な手技が求められる一方、経験できる症例が限られており、次世代を育成するための手術教育について、医療安全を交えて建設的な議論を行いたいと思っております。本学会において有用な情報と活発な議論の場を提供できますよう、教室員一人となり全力を尽くして準備を進めております。刀林会の皆様には是非ともご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

第31回 一般社団法人 日本神経内視鏡学会

未来の手術
—さらなる挑戦—

2024 11.7(木) - 8(金)

戸田 正博 | 慶應義塾大学 脳神経外科 教授
京王プラザホテル | 〒160-8330 東京都新宿区西新宿2-1-1 | TEL: 03-3344-0111 (内線)

http://jsne31.umin.jp/

日本脳神経外科学会第84回学術総会



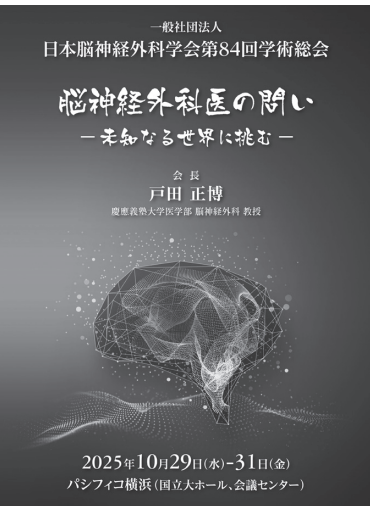
慶應義塾大学医学部
脳神経外科教授
戸田 正博 (66回)

この度、日本脳神経外科学会第84回学術総会を2025年10月29日(水)〜31日(金)の3日間、パシフィコ横浜に於いて開催させて頂くこととなりました。これまで慶應義塾大学脳神経外科では、第25回(1993年)、第64回(2005年)の学術総会を主催してまいりました。日本脳神経外科学会において最も主要な学術総会会長を拝命し、大変光栄に思っておりますと同時に、その重責に身が引き締まる思いです。

うな激しい変化の中にあっても、医師として患者さん一人一人に思いやりを持って治療にあたるのが大切であり、難病を抱える患者さんの願いに答えようとす思いこそ、医療を発展させるための原動力です。日々仕事に追われ多忙な脳神経外科医が、一度足を止めて、これからどうすべきか、将来を見据えて自ら問いかけるきっかけになればという思いから、「脳神経外科医の問い」というテーマにいたしました。

今回のテーマは、「脳神経外科医の問い―未知なる世界に挑む―」といたしました。あらゆる分野において技術革新が加速的に進み、数十年前には想像もできなかった世界が現実になっていきます。過去の経験や知識にとらわれずに、脳神経外科の未来を創造する「柔軟な思考」と「挑戦する姿勢」が必要です。一方、このよ

日本脳神経外科学会の理念は、「社会と共に歩み、脳と脊髄を守る脳神経外科」です。国際化が進む中で、欧米の専門分化した体制とは異なり、我が国が独自に確立した脳神経外科医療体制について、その良いところ、一方、改善すべきことを改めて考えます。そして、日本から世界へ発信すべきこと、さらに世界を先導できることは何かを議論できればと思います。脳神経科学の著しい進歩の中、日々診療を行っている最新の知識を常にアップデートすることは簡



単ではありません。新たな治療法や機器開発には、周到な準備とその理論的背景、基盤となる基礎研究が必要です。重要な基礎研究および臨床研究の成果を共有し、将来の医療を創造するため、研究に対するモチベーションを高めるよう後押ししたいと思います。また、さらなる治療成績の向上を目指して、エキスパートによる最先端手術を学ぶとともに、過去の経験の中で転換点となった事例を学ぶことにより、手技向上とブレイクスルーとなるアイデアの探求、考えるヒントになるような場を設けたいと思います。高難度の脳神経外科手術の技術習得には時間を要し、経験症例が限られていることが課題です。専門技術が発達する一方で、救急を含めた総合的な脳神経外科診療に携わる医師の育成も必要です。将来を担う若い医師に魅力ある多面的な脳神経外科の活動を示し、様々な視点から次世代教育システムについて議論を行います。

病院紹介

東京歯科大学市川総合病院



東京歯科大学市川総合病院は、歯学の単科大学が持つ総合病院であり世界的にも他に例が無く、1946年に歯科14床で開院した市川病院がルーツです。東京歯科大学は1890年に始まり創立者高山紀齋、そして建学者血脇守之助が慶應義塾で学び福澤諭吉の教えを受けるとの深い繋がりを保持しています。歯科・歯学にとつての医科・医学の重要性を先見していた東京歯

科大学は、慶應義塾大学医学部に支援を求めて市川病院に1949年内科と外科を加えるなど診療科を増やし拡充を続けて、1967年には市川総合病院となり新築移転や新棟増築も行ってきました。東京歯科大学は、2012年慶應義塾大学医学部・東京歯科大学連携協定を締結し、塾医学部出身の水野嘉夫先生(47回、内科)が理事長(2014〜17年)、松井(58回、外科教授)が副学長(2019年)、浅村

尚生(62回、前慶應義塾大学医学部呼吸器外科教授)が理事長(2023年)に就任するなど塾医学部、ならびに刀林会との強固な関係が続いております。

その結果、当院は大学病院としての立場を充実させ、26診療科、およびわが国唯一の口腔がんセンターなどを有し、臨床研修病院、地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、災害拠点病院などの指定を受けています。高齢化が進む中で口腔・歯科医療が全身の健康管理に重要なことが認識されるようになり、本学の先見性は現在に至って大きな実を結び、歯科大学附属の当院で行われて来た周術期やがん治療における口腔ケアや摂食・嚥下リハビリテーションなど先進的な医科と歯科の医療連携が大きな注目を浴びています。

現在、当院の常勤の医師は171(うち初期研修20)名、歯科医師は46(同14)名で、外科は長谷川博俊(66回、2020年から主任教授・部長)、瀧川稔(74回、准教授)、浅原史卓(79回、講師)、小野滋司(81回、講師)、神谷諭(84回、助教)、河合佑子(87回、助教)、小泉巨(91回、助教)のほか、専修医5名(慶應から1名)の12名、心臓血管外科に井上仁人(69回、教授・部長)、三木隆久(82回、助教)、村田哲(94回、助教)の3名、そして、脳神経外科に片山正輝(73回、教授・部長)、佐々木光(69回、教授)、釜本大(89回、助教)、今井亮太郎(94回、助教)の4名、2022年独立した呼吸器外科に江口圭介(69回、教授・部長)、井澤菜緒子(82回、助教)の2名、2023年独立した薬物療法科に和田憲昭(69回、教授・部長)の体制で診療を行っています。

実り多い学術総会となりますよう、教室員一丸となり全力を尽くす所存です。刀林会の皆様には是非ともご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

一方で、当院は地域の中核病院として高度・急性期医療を担って来ましたが、新型コロナウイルス禍は医療に大きな変動を起こし、当院でも全国の多くの病院と同様に病床稼働率の低下とともに昨年度収支は負に大きく傾きました。病床数は新型コロナウイルス禍の医療情勢の変化と厚労省の病床機能再編を受けて本年2月から現在の511床となりましたが、病院全体一丸となつて今年度から3か年を目標として大学ともども収益性改善のための取り組みを開始しています。

手術件数は2018年、2019年まで順調に増え、外科では年間10000件を超えました。しかし、新型コロナウイルス禍の間に減少し



東京歯科大学副学長
外科教授
松井 淳一 (58回)

済生会宇都宮病院

済生会宇都宮病院は、栃木県宇都宮市にある総病床数644床(外科病床数70床)、総診療科数30科、総医師数220名(含初期臨床研修医25名)、栃木県救命救急センターを付属施設に持つ、高度急性期医療および救急医療を事業の中核として担う地域中核病院です。当院は昭和17(1942)年に診療所として開設され、平成8(1996)年に現在地(宇都宮市竹林町)に新築移転し、令和4(2022)年5月に創立80周年を迎えました。特別病棟として緩和ケア病棟20床、ICU/CCU16床、小児ICU18床を有し、各々専属医師が緩和ケアや集中治療を行っています。また、令和2(2020)年3月よりECMO治療等の必要な重症新型コロナウイルス感染症患者の受け入れを開始し、県内3重点拠点病院の一つとして重症患者への治療を2大病院(自治医科大学病院および獨協医科大学病院)とともに精力的に行なってきました。

現在、外科構成メンバーは、小林健二(55回・栃木県済生会支部長)、篠崎浩治(68回・副院長兼統括診療部長)を中心に若手指導と外科症例のマネージメントを行い、古川潤一(71回・診療科長)、木全大(73回・診療科長兼内視鏡センター長)、吉川貴久(82回・医長)、鈴木博史(90回・医長)および自治医科大学外科スタッフ2名が外科スタッフとして、また、レジデントは慶應大学一般消化器外科1名、北里大学一般消化器外科1名および東京医科大学八王子医療センター一般消化器外科1名の計5名がレジデントとして総計13名で日常診療を行っています。

③大腸癌手術128件(腹腔鏡およびロボット支援下手術96件) ④肝切除46件(腹腔鏡手術8件) ⑤膵切除術36件(膵頭十二指腸切除術18件、腹腔鏡下手術9件)でした。また、当科では良性胆道疾患(腹腔鏡下胆嚢摘出術267件)を含む胆膵疾患手術症例が多く、また救命救急センターを付設することから腹部救急疾患手術件数が多い事が特徴となっています。

消化器内視鏡検査件数は年間9614件あり、当科でその半数を担当しています。特に早期食道癌・胃癌・大腸癌に対する内視鏡治療(ESD/EMR)、胆管結石に対する内視鏡治療(EST/EPBDおよびEUS、EUS-FNA)や胆道悪性疾患に対する内視鏡治療(胆管ステント等)を当科が中心となり施行しています。

2022-2023年の学術業績は、英文論文9編(原著・総説5編、症例報告4編) 邦文論文2編でした。

今後も、診療レベルの向上を目指すとともに、積極



副院長兼統括診療部長
篠崎 浩治 (68回)



的に学会発表および論文執筆に取り組み、バランスの取れた外科チームを作って行きたいと存じます。慶應義塾大学外科学教室関連病院として、多岐にわたる手術症例と責任ある指導体制のもと若手外科医の育成と地域医療の充実と発展に努めて行く所存ですので、刀林会の皆様におかれましては益々のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

私は大学でのチーフレジデントが終了後、2022年4月より2024年3月まで、米国カリフォルニア州サンタモニカにございませう Saint John's Cancer Institute (旧 John Wayne Cancer Institute) に留学させて頂きました。

Saint John's Cancer Institute は Saint John's Health Center に隣接され、がん専門研究施設であり、古くから豊富ながん患者の臨床検体を用いた Translational Research が盛んに行われております。私が所属させて頂いたおりました Department of Translational Molecular Medicine にはこれまでに数多くの外科学教室の先輩方のご留学され、多くの研究成果を挙げていらつしやいます。私自身は大腸癌、乳癌、及び悪性黒色腫の腫瘍微小環境を研究する機会を Dave S. B. Hoon 先生から頂きました。中でも、悪性黒色腫肝転移が他臓器転移に比較して免疫チェックポイント阻害薬の効果が乏しいメカニズムの解明、及び、シークエンシングの結

果を元に悪性黒色腫の免疫チェックポイント阻害薬の効果予測となりうるバイオマーカーの研究には特に力を入れて行わせて頂きました。当施設は悪性黒色腫のセンチネルリンパ節生検を世界で初めて開発・実用化したことで知られており、悪性黒色腫の検体が多く存在することもあり、他施設では行うことが困難な大変貴重な経験させて頂くことが出来ました。このような Translational Research を行うためには、検体が不可欠であり、その検体に簡単にアクセスできることが外科医の強みでもあることを学びました。また日常診療における疑問点を解明するためにどのような Study design を組み、それをどのようプロセスを進めていくかなどを学ぶことが出来ました。

私は日本では新型コロナウイルス感染症による規制がまだ根強く残っている状況での渡米となりましたが、米国では渡米当初から新型コロナウイルス感染症による規制は緩和されており、マスクを着用している人がほとんどいなかったことに驚きました。家族との時間も多く設けることができ、西海岸だけではなく、東海岸など多くの地を訪れることが出来ました。広大な大自然を肌で感じる事が出来ることも留学の醍醐味であると実感させて頂き、人間的にも一回り成長する事が出来たのではないかと考えております。

このような素晴らしい留学の機会を与えて頂きました北川雄光教授、尾原秀明先生、岡林剛史先生、日頃よりご支援いただいている刀林会の皆様に心より御礼申し上げます。今後は今回の留学生活で得られた様々なことを外科学教室に少しでも還元させて頂けたら幸いです。刀林会の名に恥じぬよう精進させて頂きたく思いますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

留学を終えて



慶應義塾大学医学部
外科(一般・消化器)
水野 翔大 (94回)

なでしこ外科医



北里大学北里研究所病院
前 ゆうき (94回相)

この度は、刀林新聞「なでしこ外科医」への寄稿という貴重な機会をいただき、ありがとうございます。94回相当乳腺班所属の前ゆきと申します。私は2024年4月より、港区白金にあります北里大学北里研究所病院にポストチーフとして勤務しております。北里研究所病院は初期臨床研修医、外科D3出向でもお世話になった施設であり、再び勤務できることを大変嬉しく思います。

私は外科学教室に入局後、2年間の出向生活を終え大卒へ帰室したレジデント時に妊娠しましたが体調が芳しくなく継続して勤務することが難しくなり、出産半年後の職場復帰まで休職させていただくことになりました。忙しい病棟生活で決して人員豊富ではない中で、休職を申し出ることにとても悩みましたが当時の同期たちが背中を押してくれ、体を休めることができました。復帰後も、仕事のペースや体力が以前よりダウンし思うように働けず、何度も気持ち折れそうになることもありましたが、スタッフの先生方にご指導い

ただきながら徐々に仕事量を戻していき、最後は病棟チーフを一年間勤めることができました。時間的制約もあるなかで一緒に働く先生方にご迷惑をおかけすることも多々ありましたが、ご理解とご配慮をいただき大変ありがたく感じておりました。

このたび、北川雄光教授のご高配により帰室いたしました82回生の藤村直樹と申します。血管・移植班に所属し、血管外科を中心とした乳腺・甲状腺外科では常勤として五月女恵一先生、非常勤として池田正先生、首藤昭彦先生、柳澤貴子先生と日常診療に当たっております。乳癌の患者さんは若年から高齢者と幅広く、治療も手術のみならず化学療法、終末期医療と多種多様なアプローチとして、一層責任がある立場になり不安を抱えながらのスタートでしたが、「患者さんのこととわからないこと、困ったことがあったら自分で抱え込まず、いつでも相談してほしい」と大変心強いお言葉をいただき、日々研鑽を積み重ねていただいております。

慶應義塾大学医学部 外科(一般・消化器) 藤村 直樹(82回)



慶應義塾大学医学部
外科(一般・消化器)
藤村 直樹(82回)

消化器外科の手術には全く入らないという体制でしたが、高難度手術では、原田裕久先生に手術のご指導を頂き、また胸部大動脈領域では、心臓血管外科部長であった大坪論先生、そして時には志水秀行教授にご指導を頂き、9年間まさしく全身の血管の手術に明け暮れる日々を過ごさせて頂きました。また手術だけでなく、循環器内科を含む科を超えた全国の先生方と交流する機会があり、複数の施設共同研究を担当したり、研究会を主催したりと、臨床以外も様々な貴重な経験を積むことができ、充実した日々を過ごすことができました。

2024年4月より、慶應義塾大学外科学教室に帰室しましたが、まずは尾原秀明先生にご指導を頂きな



慶應義塾大学医学部
外科(一般・消化器)
中野 容(90回相)

2024年4月から帰室させて頂いた皆さまは90回相当、肝胆膵・移植班の中野容と申します。私は、2011年3月に岡山大学を卒業後、2年間岡山大学の関連病院で初期臨床研修を行いました。2013年4月に慶應義塾大学医学部外科学教室に入局いたしました。その

年間、大学レジデントとして肝胆膵・移植班の臨床に従事する一方、基礎研究では、膵癌のLiquid Biopsy研究を行い、学位を取得させて頂きました。2018年4月からポストチーフ出張として、済生会横浜市中東部病院で肝胆膵外科を中心に、幅広く消化器外科医として研鑽を積んでまい

の考えを示し、信頼を得ることは容易ではありませんでした。大げさな表現ですが、海外へ挑戦するスポーツ選手と同じようなもので、自分の実力が出せれば評価され、逆にできなければ少し心配される目で見られたり、常に皆から評価されています。若くして様々なことに挑戦できるこの留学は、私にとって刺激的であり、あつという間の1年間でした。

留学で学んだロボット手術の知識や経験を慶應外科に還元し、これからの慶應外科のロボット手術の発展に貢献したいと思っております。さらにはこれから入局してくる多くの後輩に、慶應外科の素晴らしさを伝えられるよう、努力していきます。

最後になります。大学に帰室する機会を与えてくださいました北川雄光教授および尾原秀明先生、北郷実先生、あたたかく支援してくださいました関連病院の先生方、慶應義塾大学外科学教室、刀林会の皆様にごより御礼申し上げます。

帰室報告



慶應義塾大学医学部
外科(一般・消化器)
森田 覚(91回相)

私は、2021年4月より米国ボストンのマサチューセッツ総合病院(MGH)、放射線腫瘍学、Edwin L. Steele Laboratoriesへ3年間研究留学をさせていただきました。MGHは、教室よりこれまで多くの優秀な先輩方が留学されており、慶應義塾大学外科と深い絆で結ばれている施設であります。特に、私が所属しました研究室には一般消化器外科より落合大樹先生、星野好則先生、茂田浩平先生、菊池弘人先生、呼吸器外科より羽藤泰先生が留学され素晴らしい業績を残されております。

当研究室で、私は腫瘍微小環境における異常血管の正常化と免疫細胞浸潤が関わる治療反応、薬剤誘導性の有害事象を主なテーマとして研究に従事してまいりました。従事したプロジェクトでは、ヒトサンプル、前臨床モデルの両方で仮説の実証のため昼夜を問わず研究に打ち込むことができたのは、充実した日々でした。従来の研究手法に加えて、CYTOF (cytometry by time of flight) や単細胞あたりの遺伝子情報を個別に把握し数千から数万細胞にわたり網羅的に解析する single-cell RNA sequencing

留学成果報告

慶應義塾大学医学部
外科(一般・消化器)
森田 覚(91回相)

私は2021年4月より3年間、米国ボストンにありマスサチューセッツ総合病院(Massachusetts General Hospital: MGH)、放射線腫瘍学、Edwin L. Steele Laboratoriesに研究留学させていただきました。当研究室では、主に癌微小環境における異常血管の正常化と免疫細胞の挙動についての研究が盛んに行われております。

その中で、私は進行肝細胞癌に対する免疫チェックポイント阻害剤 (Immune checkpoint blockers: ICB) と血管新生阻害剤併用療法の効果と安全性/有害事象に関する検証を主なテーマとして複数のプロジェクトに携わらせていただきました。PIであるDuda教授の人脈・お力添えをいただき、日々MGHの優秀な研究者や臨床家と連携し、知見を深める多くの議論に参加する機会に恵まれました。言葉の壁はありましたが、準備を怠らず、誠実に、正確に意見を伝えることで多くのコラボレーションにつながる事ができました。留学の成果としましては、前任の菊池先生が始められた「肝細胞癌に対するICB先行投与に関するプロジェクト」を完遂し、Journal of the National Cancer Institute (2022) にその成果を発表することができました。また他のプロジェクトでも興味深い結果と進展を得られ、MGH, Celebration of Science (2022, 2023) や Forbeck forum, the biology and treatment of HCC (2023) で発表の上、これらをそれぞれ論文投稿しており、結果を待っているところであります。また、このうちの1つのプロジェクトは、MGH, Medical Discovery award (2023) を受賞する榮譽に浴しました。

本留学における費用の一部を三橋記念国際交流基金より助成していただけましたことを心より感謝申し上げます。また、このような貴重な留学の機会を賜りまして、北川雄光教授、尾原秀明先生、岡林剛史先生、ならびに平素よりご指導をいただきありがとうございます。刀林会の皆様からいただきましたご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

近況報告

55回生



生駒 光博
(55回)

平成元年に横浜・けいゆう総合病院を辞し川崎市で開業しました。バブル真只中での開業は大変でしたが19床の有床診療所で肛門疾患のほか全麻の腹部手術もけいゆう病院他の先生方にお手伝い頂き、楽しくやっております。平成21

年に病床を数床残し、入院は休止しました。以来、外来だけでなく、整形外科、皮膚科、循環器科、呼吸器科、泌尿器科の専門医の先生方にお手伝い頂き続けてまいりました。しかし今後については「終活?」も指摘され全く不明で悩ましいところでもあります。家族は妻と子2人・孫6人(全員米国生まれです)皆元気にしております。長女婿(81回)・長男(86回)はともに外科に在籍させて頂いてますが、長男家族は米国滞在が10年以上となりました。



大高 均
(55回)

2017年3月に65歳で立川病院を定年退職してからは、積年の健康管理に対する対応の甘さが仇となり多くの成人病を抱えた状態が多岐にわたりました。週3・5日の病院勤務に制限して残りをゴルフに当てる健康的な生活をしております。勤務する病院は10年ほど前にゴルフ場で知り合った方が

経営する老人病院で、8時間労働が遵守されているため規則正しい生活が送れます。既に両親を見送り、遺産整理も終わり自分の終活に腐心する状況です。子供二人も結婚、独立しておりたまに行う家族ゴルフが楽しみにしております。医者以外の友人を増やす目的で入ったロータリークラブでは、異業種の方との交流のため学ぶことが多く、充実した日常を送っています。健康に若干の不安を抱えるため、こんな生活がいつまで続くかわかりませんが今後ともよろしく申し上げます。



久保内 光一
(55回)

30回生の亡父の跡を継ぎ1993年から開業医をしていましたが、終活として施設の売却を決め2021年9月末で閉院しました。近隣の菊名記念病院に勤務したものの納得が行かず、昨年11月に検診・診断・治療



高田 育明
(55回)

淡路島の田舎の高校より突然大都会の慶應義塾大学医学部に入學させていただきました。何もわからぬまま卒業しました。外科学教室、消化器外科腸班でお世話になり、足利赤十字病院で6年間楽しく過ごさせていただきました。その後、郷里の淡路島に帰って高田医院を開業し、地域に根ざした医療を心掛けてまいりました。当初は外科手術もとの意気込みもありましたが入院施設状態となりました。

療ができる施設として「よこはま乳腺クリニック」を再開業し、手術は川崎市立井田病院でさせて頂いています。本年2月19日に後輩である水戸日赤院長の佐藤宏喜君が大動脈解離で急逝され、心から哀悼の意を表しますが、全く同じ日に同じ疾患を患いました。幸いにもB型解離だったので、治療は安静と血圧コントロールで済み現業に復しているものの、これからは己の年齢を考えて行動すべきかと考えさせられる出来事でした。

関西に帰るに当たり慶應の拠点が無く苦労した経験より、関西に慶應の足がかりを維持すること、各学部との垣根を越えた交流を目標に、兵庫県三四会、関西合同三四会に積極的に関わり、関西合同三四会、神戸慶應倶楽部、淡路三田会にも参加し続けています。

「光陰矢の如し」そろそろ終活、医院継承の時期も近づいているとは感じつつも、経鼻胃内視鏡検査、大腸内視鏡検査と忙しく働いています。コロナの暗黒時代をやっと乗り切ったと思つたら、最近のマイナナンバーカード、電子処方箋などのIT化の流れは急速で追いつけるのに苦勞の連続です。

2025年は関西の大イベント大阪・関西万博(いのち輝く未来社会のデザイン)を楽しみにして過ごしています。



田村 洋一郎 (55回相)

国立病院機構霞ヶ浦医療センターを退職後、足利赤十字病院緩和ケア病棟の立ち上げと運営に参画し、現在は茨城県南地区唯一の小規模急性期病院として存続する野上病院で、地域医療



山藤 和夫 (55回)

私は約40年にわたりさいたま市立病院(旧浦和市立病院)で消化器外科診療に携わってきました。慶應の



と病院経営に貢献すべく緩和ケア医として勤務しています。「病気に焦点を合わせた医療」から「生活に焦点を合わせた医療」に変更を迫る緩和ケアは「療養の場」の選択が肝要で、病棟(急性期対応)、同一敷地内施設(ゆとりある時間・空間・生活)、自宅(がん医総による訪問診療)のうち患者・家族が希望する場を決定します。死と隣り合う日常の中で、患者は無常な宿命に自らの思いを馳せながら、ひるまず健気に泰然として、諦観を感じているように私には思われます。

心にやってきました。また診療とは別に、初期臨床研修制度開始以来、さいたま市立病院の研修医教育体制の構築にも関わってきました。定年は68歳まで延長していただき、その定年後も再任用していただき勤務を続けてきましたが、この3月をもってさいたま市立病院を辞し、4月からは老健の施設長に就き、高齢者医療の世界に転身しました。2ヶ月前に盲腸癌で腹腔鏡下回盲部切除術を受けました。今更ですが、手術を受ける患者の気持ちがありました。

追悼記

佐藤 宏喜君(62回相)を偲んで

水戸赤十字病院 古内 孝幸 (60回相)

令和6年2月19日水戸赤十字病院の佐藤宏喜院長が急逝されました。当日朝のカンファレンスにはいつも通り出席され、特に変わった様子は見られませんでした。その後事務室で倒れたとされたこと。院内にコードブルーの緊急放送があり、救急部の先生を中心に処置が行われ、心臓外科のある近隣の病院に搬送されましたが、残念ながら救命することはできません

私、佐藤先生と初めてお話ししたのは、昭和61年の春、私がチーフレジデントで、彼がレジデントとして慶應病院に入室した時でした。お互い他大学出身で慶應病院の外科学教室に入局し、研修医出張として佐久間正祥先生が外科部長をされていた水戸赤十字病院に1年間お世話になったことが、私と同じであったため、話しかけてくれたのだと思

いました。その後、昭和62年に私がチーフ出張として再び水戸赤十字病院に赴任した後、彼も平成元年に当院に赴任されました。それからは佐久間部長のもと一緒に外科医としての修練を積ませていただきました。当時は、外科の人数も少なく、どんな症例にも対応していたこともあり、乳腺の彼も上部、下部消化管、肝胆膵と幅広く手術に携わっていました。

以前、私が深夜に研修医と2人で緊急手術をした際、骨盤内の癒着が思いのほかひどく出血のコントロールが難しい時がありました。やむなく外科の応援を頼もうとしたのですが、この日は、たまたま病院の宴会があり、ほとんどの先生が飲酒をしておりとても依頼できる状況ではありませんでした。そこで、お酒を飲まない佐藤先生にお願いしたところ、深夜にもかかわらず、すぐ



に手術室に来てくれて、柔和な表情で、「今手を洗いますね」と言って手術に入ってくれました。その後何とか止血でき手術を終えることができました。ほっとして更衣室へ戻ると、そこには「お疲れ様でした。良かったら飲んでください。」のメモと一緒に飲み物の差し入れがありました。何と気が配りができる人なんだろうと思い、ありがたく頂きました。この時のことは忘れられません。

佐藤先生は、学生時代からスポーツマンだったとのこと、サッカー、スキー、バレーボールなどが得意でした。明るく、ひょうきんなことを言い、人を笑わせるのが上手な一方、患者さんには優しく丁寧に接し絶大な信頼を得ていました。乳腺専門医として多くの乳癌患者さんの診療にあたり、県内の大学病院に匹敵する年間手術件数を1人で手掛

診療体系グループ紹介

呼吸器外科紹介



慶應義塾大学医学部 外科(呼吸器) 教授 朝倉 啓介 (81回)

呼吸器外科は5名のスタッフ(朝倉、菱田准教授、加勢田講師、政井講師、大久保助教)と6名のレジデントで診療を行っています。当科の強みを5つご紹介します。第1は胸部悪性腫瘍

に対する拡大手術で、心臓大血管の合併切除を要する症例などが他大学やがん専門病院から集まるようになっていきます。第2は加勢田講師が担当する胸部悪性腫瘍に対する凍結療法で、

これは全国の大学病院の中で慶應だけがやっている低侵襲治療です。加勢田講師は、転移性肺腫瘍に対する最適な局所治療(手術、凍結療法、放射線)をワンストップで提案する「転移性

肺腫瘍外来」を日々、開設予定。第3は政井講師が担当する漏斗胸で、成人症例では全国最多の手術を行っております。第4は24時間気胸ホットラインで、近隣医療機関から好評をいただいています。第5はがんゲノム医療で、がんゲノム中核拠点病院のインフラを生かして、臨床研究あるいは自費診療として肺癌や転移性肺腫瘍に積極的にゲノム検査を施行し、術後補助療法や再発治療の選択に役立てています。

新しい取り組みとしては、2023年に朝倉と大久保助教が中心となって肺悪性腫瘍と縦隔腫瘍に対するロボット手術を導入しました。

また、2023年から菱田准教授が中心となって気胸や縦隔腫瘍に対する単孔式手術を導入し、ロボット以外の手術の低侵襲化にも取り組んでいます。これまで当科が小開胸手術(皮切8cm)で磨き上げてきた「層構造を意識した精細な手術手技」は低侵襲手術において生かすことができ、スムーズな導入を行うことができました。

前述の取り組みにより、2023年の手術件数は過去最多の590件となり、2024年前半はそれをさらに上回るペースで手術を行っています。低侵襲治療から拡大手術まで、大学病院の強みと外科学教室のチームワークを生かした質の高い外科治療を提供してまいりたいと思います。新入局者のリクルート、レジデンスー後の研鑽、症例の紹介、臨床研究への参画、大学所属者の外勤など、関連病院を中心とする刀林会の先生方の多大なるご協力によって、当科の診療・研究・教育は支えられております。刀林会の先生方におかれましては引き続き当科にご支援を賜りたく何卒宜しくお願い申し上げます。

